研究論文

УДК 811.521

ニーズに適った教科書選び
—初級日本語教科書分析と『J.Bridge』による授業実践研究—
Опыт работы по внедрению учебника «J.Bridge» в качестве основного учебного пособия для студентов кафедры японской филологии в Бишкекском гуманитарном университете

ジュヌシャリエワ・アセーリ（カラサエフ記念ビシケク人文大学）

Абстракт

Рассматриваются вопросы критериев выбора учителем учебника японского языка, указываются недостатки используемых учебников и дается их анализ. Обосновывается необходимость взаимосвязанного формирования коммуникативной и межкультурной компетенций учащихся. Особое внимание уделяется соотнесению пожеланий и целей учащихся и содержания учебника «J.Bridge vol.1» и «J.Bridge vol.2» с условиями, в которых они будут достигаться.

キーワード：J.Bridge、教材分析、初級、コミニカティブ・アプローチ、学習者のニーズ

研究の目的と課題

外国語を教えるにはまず教授法の概要を知ることから始めなければならない。教授法を知った上で、学習者のニーズに合わせた授業を組み立てていく。教師自身の創意工夫も必要だ。日本語を教える者にとって、どんなレベルの授業であっても教科書選択が一番難しい。特に、高等教育機関で日本語を学び始める入門・初級レベル教材選びが難しい。学習者が何を求めているのか、つまり、会話力を伸ばしたいのか、漢字を含む読み書きの能力を高めたいのか、日本留学を目指しているのか、専門研究のための外国語として日本語が必要なのか、将来の就職のためなのかなど、まずそのニーズと目標を知ることから始めなければならない。

キルギスでは、現在でも『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（以降、『MNNⅠ・Ⅱ』と略す）が初級教科書の定番である。しかし、『MNNⅠ・Ⅱ』には、不十分なところが多い。例えば、

新しい事物紹介に適していない、レアリアが示されていない、少し古くなった語彙、生きた会話授業のための課題が少ない、というような点である。

ビシケク人文大学では、教育科学省の大学教育改革もあって新しい教科書採用を検討することにした。教科書に対する印象を学生対象のインタビューで聞いてみたが、半数以上の回答が『MNN Ⅰ・Ⅱ』は内容が古く現在の日本のことがあまりわからないので、別の教科書がいいというものだった。

学生の中で日本留学を経験した者の話では、日本留学後しばらくの間困ったことは、相手が言っていることはだいたい理解できたが教室で学んだことのない表現が多くて戸惑ったこと、そして、自分の言いたいことがうまく言えなかったことだという。

『MNNI・II』は文法体系を理解する上では優れた教科書だが、実際の口頭での「中身のある」やり取り練習が少なく、筆者の経験でも、学習者にプレゼンテーション能力を身につけさせることが難しかった。

そこで、2014 年から初級段階（１年生から２年生前期）の教科書として『J.Bridge』(2009) を試験的に採用し、その結果を見て正式に採用するかどうか決めることにした。本稿では、「ニーズに適った教科書選び」プロジェクトの中で行った『J.Bridge』と『MNN Ⅰ・Ⅱ』の教材比較分析と、実際にそれぞれの教科書を用いて行った授業実践の結果を幾つか紹介し、今後の研究課題を明らかにしたい。

１．授業実践対象者

ビシケク人文大学東洋国際関係学部で日本語を第１東洋言語として学ぶ１年生（それぞれ専攻課程は東洋文献学、言語学、国際関係論、国際経済論に分かれる）が『J.Bridge』を主要教材として初級日本語を１年間学習した結果を前年度までの授業内容と比較し、学習効果と教材活用法の違いを検討した。また、『MNN Ⅰ・Ⅱ』を主要教材として初級を修了あるいは学んでいる２年生から４年生および東洋国際関係学部修士課程学生の協力を得て『J.Bridge』による模擬授業も行った。

２．授業実施の期間と学習時間

新１年生の主要教材として『J.Bridge』を 2014 年 9 月から 2015 年５月まで使用した。授業時間は計 200 時間（1 日 1 コマ 80 分週 5 回 30 週間）である。2015 年には初級学習段階では『MNN Ⅰ・Ⅱ』を主要教科書として学んできた学生と東洋学・国際関係学研究科の大学院生を対象に『J.Bridge vol.1』を使った模擬授業を実施した。

３．主要教科書として『J.Bridge』採用の背景

『MNNⅠ・Ⅱ』は文字通り万人向けの日本語教科書である。いつどこで誰が使っても効果が期待できる内容になっている。初学者の自主学習教材にも適している。しかし、大学での専門教育のために日本語を学ぶ者にとっても最適かというと、そうではない。

修業年数が５年間だった時期には副教材を使う時間的余裕もあり、専攻分野の実習を兼ねた教育が可能だったが、教育制度改革で修業年数が４年間になり、また年間授業時間数も減少したため日本語のレベルアップが難しくなった。

そこで、4 年間で従来と同レベルの到達目標を維持するには短時間で効果を上げる教材が必要と考え、『J.Bridge』を目標に適する教科書として使い、『MNNⅠ・Ⅱ』との学習効果の違いを検討し、最終的な教科書選びのための教材研究を行うことにした。

４．『J.Bridge』採用の理由

１）現実的なロール・プレーのタスク

ここでいう発話力とは、簡単に言えばプレゼンテーション能力である。

身近なテーマを話題にしたロール・プレーを通じて自分の意見を述べる練習ができるし、それは発話力・発信能力を向上させることになる。また、自然な意見交換（自然な対話）をシミュレーションすることができ、聴解力・受信能力の向上につながる。

２）背景知識を増やす新しいレアリアが豊富

日本語学習にはレアリアに触れることが大事だ。レアリアを知ることで背景知識が増える。従来の教科書で紹介されているレアリアは随分古くなっている。背景知識は会話においても読解においても重要な役割を果たしている。『J.Bridge』には比較的新しいレアリアがわかりやすい説明と共に盛り込まれている。留学生として日本へ行く学習者も日本での生活に早く慣れることができるだろう。

３）直接法でも文の構造理解が容易

文法学習の際、複雑な項目はついつい媒介語を使ってしまうが、できれば直接法で文の構造が理解できるようにしたい。従来の直接法での教授を前提とした教科書では学習速度が遅くなりがちだった。『J.Bridge』は、学習者が自分で観察し理解するプロセスを重視しているので、自然な練習が繰り返され、頭で考え、疑問を解明し理解し、それを身体で覚えることによってプレゼンテーション能力がアップする。

４）「気づきのプロセス」重視

『J.Bridge』は、「観察→発見→創造」という「気づきのプロセス」を組み入れる工夫がなされている。

第 8 課の過去の表現に関する学習を例にしてみよう。テキスト 76 ページに山川さんのお母さんの生い立ちを示す絵が何枚か載っているが、まず学習者がその絵を見ながら、お母さんの生い立ちを説明させる課題がある。動詞のタ形はまだ勉強していないから、当然「～ました」「～ませんでした」は使えない。学習者は「過去のことはどう表現すればいいのだろうか」と考えながらも、結局「～ます」「～ません」で話すしかない。そして、ひととおり話し終えたところで、今度はスクリプトを見ながら、お母さんが自分の生い立ちについて語っている CD を聞かせる。そうすれば、学習者は自分が疑問に思っていた過去の表現部分に注意しながら聞き、その表現を確認することができるので、教師の説明なしに自分で過去の事柄についての表現を学ぶことができる。

５．教科書分析

『J.Bridge』採用に至るまでの教科書分析の結果は、本稿末尾の【表 1】のとおりである。

『MNN Ⅰ・Ⅱ』は媒介語による説明があり、副教材も豊富であるから独習も可能な教科書である。しかし、各課の進み方にストーリー性が乏しく、学習者にとっては必ずしも面白い内容とは言えない。次は何が学べるか、何が起こるか、という期待を持って学習を進めることができる点が『J.Bridge』の利点であり、すでに述べたようにレアリアが豊富で日本事情の教材にもなっている。大学生にとっては身近な話題、知っておくべき情報がより多く含まれているということができる。

６．模擬授業に参加した学習者の感想

模擬授業参加者は、学部生（3 年生～5 年生）11 人、大学院修士課程学生 4 人の計 15 名、全員「MNN Ⅰ・Ⅱ」で初級段階を修了している。授業は、1 年生のクラスを想定して行われた。

参加者の『J.Bridge』と「MNN Ⅰ・Ⅱ」を比較した感想（コメント）を【表 2】に記した。その結果から判断すれば、「J.Bridge」は聴解問題やタスクも主人公に関連がある内容で、主人公の人生に自分自身を重ね、ドラマを見るように興味を持って展開を楽しみにしながら学習できる、とまとめることができる。

『MNN Ⅰ・Ⅱ』に慣れた教師の中には『J.Bridge』が使いにくいという者もいたが、学ぶ側からすれば『MNN Ⅰ・Ⅱ』よりは好評で、学習意欲を高める効果が期待できる。プロジェ

クトとしては、副教材開発などの課題のほか、教える側の教授スキルの向上と活発な教材研究が欠かせない。

７．学生の到達度比較（2014-15 年度１年生の到達度）

ビシケク人文大学 2014-15 年度１年生（学習１年間、現２年生：2016 年 10 月時点）の到達度を前年度までの１年生と比較した。

１）会話力・聴解力

・日本人と話す時、あまり恥ずかしがらない。

・日本人の話を聞いてテーマは何なのか、おおよそ理解している。

・発言中、「え～と」「あのう」のような相づちが出るようになった。

→初級段階からたっぷり聴解練習と発話練習をすることが運用能力向上につながる。

２）文法理解

・発話中、また作文の中で文法ミスが目立つ。

→コミュニケーションに支障はなくても、発話・作文における正確な日本語表現を身につけるためには文法練習を数多くこなす必要がある。文法練習が十分でないと、学習が進んでもそのミスが定着してしまう恐れがある。『J.Bridge』の文法練習問題集の作成が急務だ。

３）日本語能力試験の結果

2014 年 12 月　『J.Bridge』使用の１年生 15 人受験、N5 合格４人（全体では 4/15）

2015 年７月　12 月に N5 合格の１年生４人のうち２人が N4 合格

2015 年 12 月　『J.Bridge』使用の１年生 24 人受験、N5 合格６人（全体では 6/24）

2016 年７月　『J.Bridge』使用の１年生６人受験、N4 合格１人（全体では 1/6）

＊N4 不合格５人結果（180/82、180/78 など）

２年生３人受験、N3 合格２人（ある受験生の聴解結果は 60/50）

４）日本語能力試験の合格者が少なかった要因分析

2014−15 年度と 2015−16 年度の合格率には大きな差はない。決して合格率が高かったわけではないが、１年間の学習が終了した時点ですでに従来ならば２年間の学習が必要だった N4 合格に達したものが、少ないとはいえ２名いたことで、ある程度の効果が認められる。

筆者が期待していたほどの合格者がいなかった原因としては、『J.Bridge』に文法練習課題が少ないことが考えられる。コミュニケーション能力を高くためのタスクだけでなく、文法練習を重ねる必要がある。教師が『J.Bridge』だけに頼るのではなく、独自の教材も含めた複

数の教材を併用しながら文法練習とコミュニケーション力を高める練習を同時に行うよう工夫することが大事であろう。

今後の課題

継続して日本語運用能力の伸び方を観察し、教室活動と自主学習課題を検討しながら『J.Bridge』に即した副教材開発を目指し、まずは文法練習問題集と漢字練習問題集作成に取り掛かる。日本に関する背景知識を増やすだけでなく、自分自身についてのプレゼンテーション能力につながるトピックや語彙を導入した教材も必要となってくるだろう。

【表１】　教材分析項目

	分析結果		
教科書	**J.Bridge vol.1**	**MNN Ⅰ・Ⅱ**	げんき Ⅰ
レベル	初級	初級	初級
シラバス	☑	☑	☑
ポイント			
各課で教える文法項目がはっきりしているか	☑	☑	
本文の日本語は自然か	☑		
本文の内容は面白いか	☑		
媒介語による説明があるか		☑	
学習者一人でも勉強できるか		☑	☑
例文がたくさんあるか	☑	☑	
テープや練習帳など付属教材が揃っているか		☑	☑
レアリアの絵や写真がたくさんあるか	☑		

文化的な要素がたくさん盛り込まれているか	☑	▲	☑
大学の教育課程における教科書として適当か	☑	☑	

【表２】　「J.Bridge」と「MNN Ⅰ・Ⅱ」の特徴と学習者の感想

「J.Bridge」	「MNN Ⅰ・Ⅱ」
聴解の傾向	
・聴解内容の割合が大きい →日本人の生の会話理解力アップにつながるかもしれない →聴解タスクのスピードが速めだから慣れるまでに時間がかかる	**・聴解の割合が小さい** 初級学習段階で「J.Bridge」の聴解テキストが理解できなかった可能性が高い
会話力の傾向	
・実際の場面 →実在の料理・地名・名物ばかり	→実際の場面の会話が少ない。
・コミュニケーション力アップに重点 →「自分は話せない」「自分の日本語が恥ずかしい」のようなコンプレックスを感じない。心理的プレッシャーが小さい	→文法学習が中心で自然なコミュニケーション力がつかない
・グループ・ワーク中心 →一人で発表するのが苦手な学生も緊張せず会話を楽しむことができる	→グループ・ワーク活動がほとんどない
・会話練習が多い →口頭練習を繰り返し練習した表現を使った自然な日本語で話せるようになる	→会話の流れが決まっているから自分の意見を述べるための参考にならない

語彙の傾向	
・語彙の導入	
→自然な会話文の中で文脈理解しながら語彙を増やしていく	→文脈理解と語彙の提出が一致しない
→既習単語が次の授業でも繰り返し提示され、結果的には定着率が高い。	→毎回一つ一つ覚えこむ必要がある
→英語訳がついている。	→前に勉強した単語が反復されない
→日本語によるコミュニケーション現場で使われる語彙が多い	→単語の意味がロシア語で示されている
	→不要な単語が多いような気になる
その他	
・背景知識が増える	
・日本に関する情報が豊富得られる	
・絵で文法・語彙を学ぶのは面白い	
・内容が面白いから退屈しない	
・学習者中心→主体的に学べる	・教師中心、受身の学習になりがち
・創造的な教え方が工夫できる	・創意工夫の余地が少ない

注：・はポイント、「→」の後は参加者のコメント

参考文献

春原憲一郎、横溝紳一郎（2006）「日本語教師の成長と自己研修―新たな教師研修ストラテジーの可能性をめざして―」『日本語教師のための知識本シリーズ⑤』 凡人社

鎌田修・川口義一・鈴木睦（2013）『日本語教授法　ワークショップ』，凡人社

鴻野豊子、高木美嘉（2015）『新人日本語教師のためのお助け便利帖』，翔泳社

小山悟（2007）『J. Bridge for Beginners vol. 1』，凡人社

岡崎敏雄・岡崎眸・池田玲子（2008）「日本語教育における学習の分析とデザイン―言語習得過程の視点から見た日本語教育―」『日本語教師のための知識本シリーズ①』，凡人社